

「土佐日記」の授業

－導入期の古典指導から 続－

金子 直樹

2004年度の高等学校1年生「国語総合」古典分野において、「土佐日記」の授業を実施した。「土佐日記」は、最初の仮名日記として後の和文隆盛の基を築いたものであるが、内容的には和歌と散文の融合や分散する主題など、ねらいの当て方や扱い方によって、多様な授業展開が可能な教材でもある。今回は、高等学校1年生後半の古典学習導入期において、「古典」としての独自性よりも「現代」に通じる共時性に焦点を当てて読み進めてゆくことで、今後の古典学習への望ましい態度を形成することを目指した。学習者は、「土佐日記」の学習を通して、「古典」を「現代」の文化として主体的に読み深めてゆくことができた。

1 はじめに－問題の所在－

本稿は、昨年の研究紀要「『伊勢物語の授業』－導入期の古典指導から－」（本研究紀要45巻2005.3）の続編である。現代に生きる中高校生にとっての古典学習の意義を、テキストの内容を鵜呑みにするだけではなく、古典そのものを現代に生きる私たち自身との関わりの中で捉え直し、次の文化を創り出してゆく原動力とするということに見出したい。前稿の考察で－古典を読む際に、さらに重要なことは、古典の「主体化」である。「現代の私達と違ったり同じだったり、いろいろ考えさせてはくれるけれども、所詮は何か遠い世界の別のもの」という絶望的な距離感を超えて、古典を受け継いでゆく文化を自らが作り出しているという「当事者意識」を少しでも育むことである。－と述べたが、本稿もその目的で行った実践報告である。

2 教材としての「土佐日記」

「土佐日記」は最初の仮名日記であり、後の和文隆盛の基となった作品である。文章としては平易で、和歌（韻文）と散文との融合に巧みであり、また内容も亡児追憶や風刺批判など多様なものを含んでいる。

『土佐日記全注釈』（萩谷朴）では、「主題」として（イ）歌論展開、（ロ）社会風刺、（ハ）自己反照、「構成と手法」として（イ）戯曲構成、（ロ）脚色虚構、（ハ）擬装臙化、（二）女性仮託、（ホ）諧謔効果、（ヘ）一貫照応、（ト）反復学習、の各項目を挙げている。『新日本古典文学大系』（長谷川正春校注・解説）では、作者紀貫之の屏風歌作家としての一面や、作品の全体を覆う幫間構造から作品を読み解こうとしている。

作品自体は短く、決して難解ではないものの、その多岐多様にわたる内容や表現などテキスト自体が提出する問題点は多く、俗に言えば「おもしろいけれどもまとめ

にくい」作品であろう。

そのため、高等学校の授業でも扱いづらい教材となっている。「国語総合」教科書所収状況も、「船出(12/21記事)」と「忘れ貝(2/4記事)」だけである（当校の現行使用教科書「精選国語総合古典編 筑摩書房」）。他の教科書においても状況は大同小異であり、冒頭「門出(船出)」と、途中記事の一つ（「忘れ貝」「黒鳥」「阿倍仲麻呂」等）か、後はせいぜい「帰京」を含むか否かという程度である。「国語総合」は4単位という制約からやむを得ないとはいうものの、これでは出発してすぐ帰京の旅となってしまうか、「土佐日記」全体への理解も途中の取上げた記事の内容次第で「忘れ貝」ならば親子の愛情、「阿倍仲麻呂」であれば和歌への愛着だけ、という極めて偏った部分的なものにとどまるおそれもある。

もとより教科書は素材集であり、編者の意図も所収教材を足がかりにした発展した学習にある。そこで、あえて「土佐日記」の多様性に着目し、多岐多様にわたる「土佐日記」の内容をまとめることによって、学習者の理解の枠組みを拡げるという単元構成を試みた。①多様な内容の記事を多く読むことで、全体の構成や結びつきを考える、②全体の構成や結びつきを考えるためには、一つ一つの記事を正確に深く読み取らなければならない、という活動を相互にフィードバック的に仕組むことを通して、古典学習の「主体化」をはかろう、と計画した。古典を、「どこか取り澄ました、自分とは縁遠いもの」としてではなく、身近で親しみのあるものとして読ませたい。その親しみやすさの要素として、時代を超えても変わらない「子を思う親心」や「人間存在の滑稽さ」という読解の内容面だけでなく、「言葉」を用いて自己実現をはかる表現の欲求や、「言葉」と格闘する人間の文化という面からも、古典を学習する意義を考えさせてゆきたい。

3 単元計画

単元名：「土佐日記を読む」

対象：2004年度4年生(高校1年生)5クラス

時期：10月から2月初まで(約15時間配当)

単元目標：

①「土佐日記」を読み、和歌に注目しながら場面や状況を理解する。

②「土佐日記」が作り出され、受け継がれてきた文化や、人間にとっての「書き記す」「歌う」欲求について考えることを通して、古典の意義について理解する。

③古典文法や古語単語を学習し、古文をより深く読解すると共に、現代語との関わりを通してことばの果たす役割について理解する。

授業展開と教材

【I 読解の過程】

- ①「門出」＊ 12/21～12/26
(歌：「都出でて」「しろたへの」)
 - ②「行く先に立つ白波」 1/7
(歌：「浅茅生の」「行く先に」「行く人も」)
 - ③「まねべども、えまねばず」 1/17、18
(歌：「棹穿波底月」「水底の」「影見れば」
「磯ぶりの」「風に寄る」「立つ波を」)
 - ④「黒鳥のもとに白き波を寄す」 1/20、21
(歌：「青海原」「都にて」「我が髪」)
 - ⑤「忘れ貝」＊ 2/4
(歌：「寄する波」「忘れ貝」「手をひてて」「行けどなほ」)
 - ⑥「楫取の心は神の御心」 2/5
+参考プリント「楫取について」(「土佐日記」中の「楫取」についての記述を全て抽出したもの)
(歌：「今見てぞ」「住の江に」「ちはやぶる」)
 - ⑦「心地悩む船君」 2/6、7
(歌：「いつしかと」「来と来ては」「疾くと思ふ」)
 - ⑧「渚の院」 2/8、9
(歌：「世の中に」「千代経たる」「君恋ひて」「なかりしも」)
 - ⑨「帰京」 2/12～2/16
(歌：「久方の」「天雲の」「桂川」「生まれしも」「見し人の」)
- (注：＊教科書所収の1と5については、教育実習生の授業をもとに、補充を行なった。)

【II まとめの作業】

「土佐日記」で紀貫之が試みたことについてまとめる。

- ①「古今集 仮名序・真名序」を読む。
- ②「土佐日記」を学習して、一番印象に残った部分やおもしろかった記事についてまとめる。＝部分まとめ
- ③学習全体を通して、様々な要素が盛り込まれていることをふまえて、なぜ貫之はこのような文章を書いたのか(理由)／「土佐日記」はどのような意味をつのか(結果)についてまとめる。＝全体まとめ

4 授業の実際－学習記録から－

「土佐日記のテーマ」、「土佐日記が果たした役割」という抽象的な課題に取り組むためには、個々具体的な記述についての十分な理解が必要である。また、高等学校1年生という段階からして読解の焦点を絞る必要もある。実際の授業での読解のポイントや進め方を、以下に学習記録からの生徒の意見・感想を抜粋して報告する。(下線部は引用者による。)

生徒感想例①「行く先に立つ白波」1/7記事

「歌詠まむと思ふ心ある人」の訪問では、貫之たち一行がこの男の和歌によってげんなりしている様子がはっきりと、とても滑稽に描かれている。同じ日に訪れた「よき人」の持ってきた料理や和歌との対比や、「ある人の子の童」の和歌との対比などによって、より一層この男の未熟さや和歌の下手さ加減が浮き彫りになっている。この男の訪問の部分での貫之の口調は辛らつである。これほどまでにあからさまに言ってもいいのだろうか、読んでいる私の方が心配するくらいだが、実は作者＝女という仕掛けがあるから心配することもないのかもしれない。門出の部分でもそうだったが、だとすれば、「男もすなる日記といふものを女もしてみむとてするなり」という工夫は自由な文書をかくために必要なことだったの
だろう。(E組YM)

生徒感想例②「まねべども、えまねばず」1/17記事

「土佐日記」の中で貫之は女性を演じているのだけれども、賈島の詩について、「私は女なので漢詩はよく分からない」といったことが書かれており、貫之が作品を書く中での抜け目なさがにじみ出ている。ミエミエの嘘をあえて念押ししているところなど、貫之がノリノリで女性になりきっているような気がしてならない。(E組HM)

生徒感想例③「まねべども、えまねばず」1/18記事

貫之さんの旅はなかなか順調には進まないようで、また足止めをくってしまった。やはり今とは違って船旅は命がけなのだろう。楫取も黒雲にびびっている。いったいつになったら都に帰れるのだろうか。話は変わるが、この「土佐日記」が、初めから人に読ませるために書かれたのか、それとも本来の「日記」を書いているうちにおもしろくなってきて後で手を加えて世に出したのか、疑問だったが、今日の部分でモヤモヤが少しはれたような気がする。さすが貫之大先生、ただの日記と見せかけて、実は歌の教科書だったのですね。彼の毒舌もきくと、読者を飽きさせないためのテクニックだったのでしょうか。(C組TN)

生徒感想例④「黒鳥のもとに白き波を寄す」1/21記事

さて今日は久しぶりの出航であるから、貫之さんも「春の海に秋の木葉」などと機嫌よく言っている。しかしそ

ここで楫取が「黒き鳥のもとに白き波を寄す」ということを、よりによって貫之大先生の前で言ってしまった。文学の大將である自分の前で、教養のない者がそんなことを言うのが、ケンカを売られたように思えたのだろう、歌を詠んで、「返してみやがれ」と言わんばかりの態度を取っている。こんな大人げないやりとりのおもしろさも、筆者が自分を偽っているからこそ書けるのだろう。

(C組KH)

生徒感想例⑤「忘れ貝」2/4記事

「土佐日記」はもうかなり老境に入っていた貫之が書いた文章である。しかし彼はまだまだ「枯れる」ことなく、始めから駄洒落を連発したりして、老人と言うより「面白いちょっと変わったおじさん」くらいに読んでいるうちに錯覚してしまう。それがここにきて、いきなり「亡き娘が忘れられない」である。歌を見て、しかも「拾はむ」「拾ひしもせじ」とかなり込み入った心情を読んで、気持ちは分からないことはないが、やはり今の私の年齢だとまだピンとこない。それよりも、貫之の人生経験の長さ、というものを急に見せつけられたような感じで、なんだか印象に残った。(C組TS)

生徒感想例⑥「忘れ貝」2/5記事

貫之の「船とく漕げ」という命令に対して、船のことを知らないくせに口出しをする素人(船主)に対する楫取の皮肉が、「綱手はや曳け」と歌のようになっている場面は、うまい、と思った。だが、よく考えてみると、ここで皮肉を言われているのは船主=貫之=作者であるはずなので、自分で自分を皮肉っていることになる。二重に、うまい、と思った。参考プリントで船主 vs 楫取の勝負を見ると、貴族だけれども傲慢な船主が、したたかで品のない楫取に追い込まれているようだ。この対立も、「土佐日記」をおもしろいものにしていていると思う。

(B組KT)

生徒感想例⑦「楫取の心は神の御心」2/5記事

強欲な楫取が住吉明神のことを「強欲だ」と言うあたり、さすがの貫之もがっくりきているが、じつはこれが伏線となっていて「かがみ」を「かぢとり」とすると「かみ」になるというトリックが隠されていた。最初はびっくりしたが、神様をあがめていた当時、こんな冗談を言ってもいいものなのか、とちょっと思った。しかし、よく考えてみると、やはりこれはことばに詳しい大歌人である貫之だからこそできたものだ、と思った。この日記は、仮名文字で記すことによって、漢文では描けない微妙な感情や、日本語そのものの遊びなどの「ことばの可能性」を表現することができる、「日記」の枠を超えた「日記」だ。(D組KK)

生徒感想例⑧「楫取の心は神の御心」2/5記事

この話のオチは、最初わからなかった。隣で大笑いし

ているY君に聞いてやっと分かった。まさか「か字取り」なんて…。「なんてしょーもない」と思ったが、よく考えると、そもそも海が荒れる場面から「貫之ピンチ」と思っていたら、実は楫取との会話に「ゆく」ということば遊びが使ってあって実はけっこう楽しげだったりして、というムードだったのだ。「土佐日記」は油断がならない。(C組KY)

生徒感想例⑨「心地悩む船君」2/7

都近くなり、普段は歌など詠まない人が読んだので、それに触発されて「船主」も二首詠んだが、内容が劣っているといつてふて寝してしまった。貫之は和歌の名人のはずなのに、どうしたことだろうか。このあたりには、貫之のユーモアが感じられる。和歌の名人が和歌で負けて悔しがり、悔しがっていたかと思うと夜にはしっかり高いびきである。自分を卑下して表現しているのだが、貫之は、「土佐日記」に描く「貫之」を自分で楽しんでいるように思った。(E組MM)

生徒感想例⑩「渚の院」2/8、9記事

今日の話は、前回までの「こっけいさ」や「ことば遊び」とは違って変わって、「嘆き」が主題でした。こういうことは普通に知っている物語などではあまり無いように思うけれども、「土佐日記」では「なんでもあり」のよさをうまく引き出せていると思いました。(A組AY)

生徒感想例⑪「渚の院」2/8、9記事

貫之一行が「飯粒して鮎つる」とこそそそと言っているのには同情します。「世の中うまくいかないねえ」という思いがひしひしと伝わってきますが、どうやらこれが貫之のねらいだったようです。翌日には「渚の院」で在原業平がひと昔前に詠んだ歌に共感して「世の中うまくいかないねえ」という歌を詠んで、感情を重ねています。「土佐日記」には、和歌講座や亡き娘への追憶や、ことば遊びなどの要素に加えて、こんな詠嘆や不満までも描かれていて、貫之のねらいが多すぎるような気もしました。(D組OS)

生徒感想例⑫「帰京」2/15、16記事

さて、ここ最近の貫之はなんだかひねくれているようだ。都に近くなり、人々に歓迎され、何年経っても変わらない看板を見て懐かしさを感じているようであっても、どこか人を信用していないふうである。これまでも何度か思ったことだが、貫之の視点は、どこか高いところから世間を見下ろして(みくだしてではありません)いるような感じがする。特に今日「人間なんてこんなものさッ」というあたり、「女」ではなく「貫之」の姿がにじみ出ている。いや、出しているのだろうか。(E組YS)

5 まとめ—生徒のレポートから—

読解の過程①「門出」から⑨「帰京」までで、分量にして「土佐日記」のおよそ60%の部分を読んだ。読み重ねてゆくうちに、作者「紀貫之」という人物の全体像を深めたり、類似の内容・表現に出会うことで部分から全体への手がかりを見つけ出した者もいた。

「古今集」の「仮名序・真名序」は、平安時代までの漢文受容の歴史と和文隆盛の簡単な文学史的知識とあわせて、一時間で簡潔に読んだ。

最後に、全体を振り返って一番印象に残った「部分」について整理(課題Ⅰ)させた上で、「全体」に関わる記述を求めた

課題Ⅱ

「土佐日記」には、構成上「女性仮託」の仕掛けがあったり、内容表現面で「和歌講座」や「亡児追憶」、「諧謔・滑稽表現」や「風刺・批判的態度」があったりなど、様々な要素が盛り込まれていました。

作者紀貫之は、なぜこのような文章を書いたのか、「土佐日記」はどのような意味を持つのか、についてまとめなさい。

「なぜ」書いたのか、という理由の詮索が難しければ、「どんな」意味を持つのかという結果・影響に焦点を当てて書いて構わない、ということを示した上で、「土佐日記」の全体像について、複数の(ただし、全部を結びつけなくてよい)問題点・論点をまとめ、統一的に記述することを求めた。なお、このまとめの作業については、読解の過程で事前に予告しておいた。以下に生徒のレポートを抜粋して報告する。(まとめの分類や下線部は、引用者による。)

生徒文例① 和歌教授

「古今集」仮名序で貫之は「歌は何よりも優れている」と言っている。だから、貫之はあくまでも「歌」を中心にして「歌」を広めるために「土佐日記」を書いていると思う。「土佐日記」は、当時の人たちにとっては、今で言う雑誌やカタログみたいなものだと思う。当時の人にとって「和歌」はできるとかっこいいものに違いないから、私たちにしてみればどんなファッションがかっこいいか、どんな料理がおいしいか、どうすればかっこよくなるのかと同じように、あらゆることを和歌に結びつけて、分かりやすく書いてあったということなんだと思う。(B組UA)

生徒文例② 表現の視点

貫之は「土佐日記」で日本語の可能性を掘げようとしたのだろう。和歌は、気持ちを伝えるための身近な手段として存在していたけれども、それだけではない、「日

本語でこんなにいろいろな表現ができるのだ」ということを提示したかったのだと思う。

しかしなぜ貫之は女性仮託をしたのか。堂々と男として書いてもよさそうなものなのに、なぜそうしなかったのだろうか。男と仮名との結びつきが一般的ではなかったということ以外に、自分以外の視点で書く文章(物語)の可能性をも試していたのでは、と思う。「土佐日記」はノンフィクションのようであるが主人公=作者ではないし、最後の「とく破りてむ」とあるのに実際には捨て去られていない、というあたりから、これは貫之が作り上げた「女」が主人公の「物語」としての要素もあるのかもしれない。(C組TS)

生徒文例③ 表現の視点

女性のふりをして書いたのは、当時主に仮名を使っていたのが女性だったことが大きな理由だろうけれども、他にも何か理由がある気がします。世間体を気にしたのだとしたら、女性のふりをして嘘を書くというほうがよほど問題になりそうです。いろいろ考えてみて思いついたのは、女性のふりをすることで、第三者の視点から書ける、ということです。こうすることで本人のままでは書きづらい皮肉や嫌みや、当たり前を書くことと講義のように難しくなってしまう和歌講座など、盛りだくさんな内容を、書きやすくまとめることができるということです。

(A組YM)

生徒文例④ 仮名・和文の創生

私は、「土佐日記」は貫之が後生への教科書みたいなものとして書いたのだと思います。「土佐日記」を書いた頃には貫之はもうおじいさんでそんなに長くは生きられないと思っていただろうと思います。自分でも自分の才能を認めていた貫之は、まるで自分に与えられた使命であるかのように、仮名でどんなことでも書けるのだということを表わすために、和歌講座や亡児追憶や滑稽表現や風刺批判など、あらゆる内容をわざわざ取り入れて「土佐日記」を書いたのだと思います。「男もすなる日記といふものを女もしてみむ」という嘘から始まり、「とく破りてむ」という嘘で終わるのは、嘘を嘘で返すことによって、ここに書いたことは実は全部本当なんだ、ということを表わすためだったのだと思います。本物の才能を持った貫之が、後生に残そうという強い意志を持って書いたから、「土佐日記」は後に影響を与え、また現に私たちが読んでもおもしろいのだと思います。

(A組SM)

生徒文例⑤ 仮名・和文の創生

貫之は有名な歌人でありながらも貧しい貴族であった。藤原氏の独占時代で貫之は田舎へ赴任するしかなかなく、任国で愛する娘を亡くしてしまう。まさに不遇の人生といえよう。彼はそんな悲哀をこの「土佐日記」に託した

のではあるまいか。社会への不満や不安は、31音の短い和歌に託して言い尽くすことはできない。そこで、より容積の多い散文の日記という形式を選んだのであろう。

(D組NA)

※この他にも、「和語計画・和語普及装置」(A組YM)「日本語大作戦という貫之の陰謀」(C組IC)等、「仮名・和文の創生」という着眼多し。

生徒文例⑥ 仮名・和文の創生、日本語の特質

「土佐日記」のすごいところは、読者に語る要素が和歌講座や亡児追憶など様々であるのに、それが一つのまとまりとして存在して違和感がない、ということである。だが一方ではストーリーが簡潔で単純化されすぎていて情景を把握しづらい点もある。補習で読んでいる「更級日記」と比べても、説明が少なく理解しにくい所もあった。これは、「土佐日記」が漢文と同じような書き方をしているからだ、とも言えるだろう。漢文が主流だった時代に、仮名文字を使って伝統を破ろうとした「土佐日記」は、過渡期にあつての先駆者と言えると思う。(D組SA)

生徒文例⑦ 仮名・和文の創生、日本語の特質

「土佐日記」が滑稽な表現やことば遊びをたくさん用いているのは、和歌をこよなく愛して、和歌の大きな技巧の特徴である掛詞＝同音異義語に精通していた貫之だからこそできたことなのだと思う。同音異義語が多いという日本語の特徴に正面から立ち向かって、日本語の持っている可能性を最大限に引き出そうとしたのが「土佐日記」なのだ。(B組SM)

生徒文例⑧ 仮名・和文の創生、文化の変遷

「土佐日記」には非常に多くの要素が詰まっている。「ごった煮」ではあるが、しかし無秩序な感じはなくむしろ分かり易く整っている。935年、貫之がこのような作品を表わしたのは、遣唐使がハクシに戻されてから40年国風文化が開こうという時期だ。この時代の流れを背景に、貫之はMade in Japanの可能性を宣伝しようとしたのではないか。「『日本の文字』を『仮名』なんて呼ぶけれども、こんなにも完成された文章も書けるんだ」と示しているのではないか。「土佐日記」の目的が「ナショナリズムの高揚」とまで言い切ると、さすがに疑問符がつくが、結果的には彼のまいた種は日本の仮名文学として大きく開花した。(C組KY)

生徒文例⑨ 新しい文学形式

「土佐日記」が書かれた935年のちょうど30年前の905年、最初の勅撰和歌集である「古今集」が編纂された。そこでは仮名で書かれた「仮名序」、漢字漢文で書かれた「真名序」の、ほぼ同じ内容の二つの序文がある。10世紀初めのこの時期は、古くからの韻文や漢詩文の伝統が強く、仮名は発明されてはいたがまだ権威が弱

かったため、二つの序文が書かれたのである。また、初の物語「竹取物語」や「伊勢物語」が作者未詳のままに成立したのもこの時期であった。そんな時期に、全てを仮名で書き、また、作者の個性や性格をそのまま描くという新境地を開拓したのが、この土佐日記であった。

このような流れをふまえて「土佐日記」を見直すと、構成においても内容においても、実に複雑で多様であることの意味が明らかになると思う。「女性仮託＝嘘」という武器を最大限に活用して、正面切っては言いにくい事柄も鋭く表現したり、ことばの可能性を拓ける試みをしたり、と様々な要素を盛り込んでいる。それは、「かなで、自分の思いのままを表現する」ことを初めて試みたからであろう。今までの伝統やスタイルを打ち破り、さらにはことばや文学の持つ可能性を広げてゆくため、貫之は「土佐日記」で様々な試みをしたのだと思う。斬新な「土佐日記」を書いた貫之という人物は、とても賢く、肝の据わった人間だと思った。(E組YM)

生徒文例⑩ 新しい文学形式

「土佐日記」は、いわば大きな実験だった。貫之自身が編者の一人である古今集による、日本文学の大きな変化を受け、次なる試みとして実験的に散文を書いたのだろう。ただ散文を書いた、というだけではなく、和歌講座や亡児追憶、滑稽表現、風刺批判など様々な内容や女性仮託などの仕掛けを組み込んだものに仕上げていく。これらは、従来の和歌や漢詩や物語という枠を超えることを目指していたのではないだろうか。特に、「土佐日記」中でしばしば見られることば遊びに関しては、いかに韻文から散文へと移行させてゆくのかの実験に違いない。そして、この実験は結果として、後に「枕草子」や「源氏物語」などを生み出すきっかけともなったのである。(E組IR)

生徒文例⑪ 新しい文学形式

「土佐日記」の成立を、参考プリントやまとめの授業を通して振り返ってみると、日本初の、一個人によって書かれた散文のまとまり、ということがわかる。現在書店に並ぶ多くの現代日本文学と呼ばれるものは、ほとんどが「土佐日記」と同じく一個人によって書かれた散文であるから、「土佐日記」はそのルーツと言えるかもしれない。現代文学は、小説や評論・随筆など様々なジャンルがあるが、「土佐日記」を関連づけてみると、女性仮託はフィクション、和歌講座は評論、亡児追憶は私小説、風刺批判は随筆、諧謔表現はそのままユーモア小説へとつながる。貫之が意図していたかどうかは分からないが、「土佐日記」によって文学の扉が大きく開かれたことは間違いないと思う。(D組MM)

生徒文例⑫ 新しい文学形式

貫之の仕掛けは実にこの作品の虚構性をもり立ててい

る。当時相対的に低い地位にいた女性の視点で仮託されていたという点で、貫之の世に対する強い不満が、女性的要素を持つ「仮名」によって柔らかく、しかし核心を外さず描かれている。また重要な点としては、多岐にわたる要素を含むことで、より現実的、人間的に描かれているということである。貫之は、従来にはない手法として自分のたどった人生をそのまま文章に書き記すことによって、私たちと共通の感覚を持つことができ、同情共感などを互いに感じ合うことで、「文章」という非日常的世界を超えて、血の通った人間味のある現実世界の「体験談」となることが可能になった。「土佐日記」では、和歌や漢詩という単一の表現形式に依らず、その中核をなす虚構や日常性などの様々な要素が互いに補完し合い、決して「文章」という枠組みにとらわれることなく、平安朝の一人の人間の視点でまとめられている。(B組 I K)

生徒文例⑬ 新しい文学形式

貫之はおもしろい人だ、と思う。新しいことを試してみたかったのだと思う。すべて仮名で書かれていることもそうだが、貫之自身が「こんな文章を読みたい」というものをたくさん詰め込んで作り上げた、あくまで読み手の視点から書き上げたものがこの「土佐日記」なのだろう。単に日記という枠にとどまらず、読み物として書かれたものであり、貫之自身読むのが大好きでたくさんの文章を読み、当時はまだあまりそういうものが少なかったからそれでは足りないで、自分でも文章を書いたのだろう。他の人が貫之の文章に影響されて、まねをしてよい作品をつくってくれることを望んでいたのかもしれない。貫之は、歌をはじめとして心から文章を愛した人であり、この「読ませる文章」が平安時代から今まで、これから先も、小説家など文章を書く人すべてに受け継がれてきたのだ。(C組 K Y)

生徒文例⑭ 新しい文学形式

一学期に「伊勢物語」で勉強したように、この時代の作品では作者の名前を明記しないのが普通だったのだろう。集団の記憶や語り継がれる内容が文字になった、ということもあるだろうし、名前を書いておくことをただ思いつかなかったのかもしれない。

そんな時代の考えからすると、貫之は自信があつて目立ちたがりやで自己主張の強い人だったのかもしれない。また貫之にはその自信を裏付けるだけの才能(というよりもアイデア)があつた。女性仮託を思いついたりユー

モラスな仕掛けがあつたり…。このようなネタは現代にも多く受け継がれているが、多くは使い古された二番煎じになっている。大切なのは、元ネタを誰が考えたのか、ということであろう。貫之は、「プロジェクトX」の挑戦者である。(C組 MM)

※この他にも、「作者を前面に出した貫之ワールド」(A組 F N)、「涙あり笑いありの貫之珍道中」(C組 I Y)「自分の書きたいことだけを書くよるづ自由ノート」(E組 O T)など、「新しい文学形式」という着眼多し。

同じ「土佐日記」の読解を基にして、各自の視点でレポートをまとめるとなると、その視点の当て方、まとめ方に生徒個々の学習の成果や個性が表れてくる。生徒はそれぞれ「土佐日記」の問題点を的確に取上げ、個々の記事内容の読解に基づいて結びつけようとしていた。そのまとめの過程の中で、再度、個々の記事内容(理解)に立ち戻らざる得ないという、部分と全体との相互作用は、うまく機能したと思われる。

また、現代の私たちの自由な表現の基として「土佐日記」を理解し、さらには現代の前衛芸術の難解さと「土佐日記」の奇妙さを対比して論じるものなどもおり、古典が現代の私たちの社会に生きているというつながりをも実感できたと思われる。

6 おわりに

このような学習活動の後では、まとめのフィードバック、友達がどんなことを書いているのかをさらに参考にすると、という過程が不可欠である。まして、「おもしろいけれどもまとめにくい」この「土佐日記」についてはなおさらである。生徒達も興味を持って、自分とは違う焦点の当て方まとめ方に対しては「こんなまとめ方があるのか」と真剣に読んでいた。

今回の授業展開では、高校1年でまだ古文へのなじみが薄いということと、同じ材料を基にしての各人のまとめ方そのものを問うということから、全部を指導者による授業・読解の同じスタイルで通し、最後にまとめを行なうという方法をとった。途中でグループ活動の形式による中間まとめを取り入れれば、また違ったまとめ方を導き出せたものと思われる。さらに、グループ活動の形式を取り入れる、ということに関して言えば、「土佐日記」道中の記事を適宜分担してグループ毎に発表させるというグループ演習形式による授業展開も考えられる。今後の課題としたい。